

岩手県内の沿岸部大槌湾に面した海沿いの町で鉄道や主要道路も海岸に沿って走る地域。平成 23 年 3 月 11 日に発生した津波は、大槌川と小槌川 2 つの川を逆上って川から溢れ、濁流が町の中心部を襲った。町役場付近で 10.7m、吉里吉里港では 22.2m、赤浜では 12.9m の津波浸水高を記録した。

町役場は津波に呑み込まれ、町長以下職員が行方不明となり行政機能が麻痺。盛岡市から車で数時間かかる地勢も災いして孤立したような状況がしばらく続いた。JR 山田線・大槌駅の駅舎も津波で流失。加藤町長が同年 3 月 19 日に遺体で発見されたとの情報や、観光船「はまゆり」が民家の屋根に乗り上げている写真などがメディアに掲載され、大槌町の被災のすさまじさが全国に伝播した。

大槌町災害復興室・震災状況ホームページ（HP）によると同年 9 月 30 日で、大槌町の死亡者は 802 人、行方不明者 551 人、住宅や建物被害（全壊数＋半壊数）は 3677。大槌町の婦人消防協力隊員の犠牲者は、死亡者 4 人、行方不明者 10 人（岩手県消防協会調べ平成 23 年 8 月 22 日現在）。

### ●東谷さんの場合（沿岸部・吉里吉里地区）

#### 後ろは見ないで高台へ

わかめやホヤなどを養殖している。午前中は夫と息子の 3 人で浜に出て仕事をした。昼食時に帰宅し、漁協の会議に出席する外出の途中で地震が発生。私は家に帰り、夫はトラックで浜に向かった。家には 89 歳の姑がいる。昭和 8 年 3 月 3 日の津波を体験している。当時住んでいた家よりも今の自宅は高台にあるので、「ここまで津波は来ないから逃げない」と駄々をこねる。嫁や孫たちには「すぐに逃げて！」とペットの犬も一緒に車で先に避難させた。ぐずる姑の手を引き、口では「ゆっくりでいいんだよ」と声を掛け、転ばぬように気遣いながらも、道路は通らずに庭や畑を乗り越えて避難場所の小学校に急いだ。

校門に到着した途端、後ろから「波が来た～」との声が聞こえた。津波の第 1 波だった。私は先人の教えを守って後ろを振り返らなかった。波が押し寄せるのを見てしまうと恐怖心で足がすくみ、呑み込まれてしまうといわれているから。

家族は無事だったが、家も倉庫も、仕事で使う機械類も全て津波で流出した。現在は仮設住宅に暮らしている。

#### 支援活動を即開始

その日のうちに姑を高台の安全な義妹の家に連れて行った。義妹は不在だったが、隣家の人「ばあちゃんは預かる。あんたは避難所でやることあるんだから、避難所に早く戻れ」と、親切に言ってくれた。

流されたコンビニエンスストアのローソンから、商品だったお菓子類を貰い受け、小学校の体育館に避難された約 400 人に配った。1 人につき飴玉 1 個・クッキー 1 枚だった。協力隊の仲間 3 人と分配の作業を終えて体育館に戻ると、毛布は 1 枚しか残っていなかった。寒い中 1 枚の毛布を足にかけて 3 人で身を寄せ合って休んだ。

家族はどうしているか・・・情報は何もなく不安な一夜が明けた翌日 3 時過ぎに、夫が避難所にやってきた。夫は元消防団長、息子は現役の消防団員だ。家族は全員無事で他の避難所にいることが分かりホッとした。雪が降っていた。夫の「こんな時には何か食べものを出して、みんなの気持ちをほぐすことがあんたの役目ではないのか・・・」との言葉に後押しされ、私のやることは「炊き出し」だと思い、立ち上がった。

小学校家庭科調理室の利用を、校長は快く受け入れてくれた。日頃の私の活動（婦人消防協力隊副隊長）を知っている地域住民が、「幸子さん、何したらいい？」と聞いてくれたので相談しながら役割を決めた。近くの湧き水からの水汲みは、ちょうど帰省していた大学生たちをお願いした。大切な水は、無駄のないよう丁寧に使った。調理室のプロパンは健在、調理器具・食器も使えた。食材の米・野菜等々は地元の方々に提供をお願いした。若い母親たちも手伝ってくれた。鍋を使っての炊飯方法を教えたが、彼女たちは電気釜炊飯の世代なのでうまく炊けずに失敗した。大切な米は、蒸し器で蒸し上げてから味付けの小さいおにぎりにして再生した。4 日目からは地域住民からの食材提供が円滑になり、本格的な炊き出しが可能になった。そして 1 週間後には支援物資が届くようになった。おにぎりは、自分のいる避難所だけでなく他の避難所の分まで毎回 600 人分ほど作って配った。今回の炊き出しで「人間にとって『食』は、本当に大事だ」と、痛感した。

### 集団生活での人間関係は難しい

人と人の関係を円滑に進めるのは難しい。「手伝います」と、調理場に来てくれた女性グループが、お願いしたことを無視して勝手な行動をとり、挙げ句に気分を害したようで、なんだか関係がぎくしゃくすることもあった。私の指示で一生懸命に手伝ってくれている人たちにも混乱が生じ、調理場の雰囲気が悪くなった。これを解消するため彼女たちを説得したり、みんなで話し合いの機会を作った。避難所の中でお互いに理解し合うためのコミュニケーションに気を使った。

### 高齢者に動いてもらう

避難所に避難された高齢者の行動は限定される。ショックと不安のストレスで、日に日に心身が弱っていく。避難所には地域の看護師も避難していたのでお世話をお願いした。日赤の医療支援が入るまで高齢者の持病薬配布はできなかった。

私たちに世話してもらうことの遠慮もあるかと思って、当初、避難所被災者には食事だけでなく箸やお茶まで各個人の所まで出向いて配っていたが、高齢者は狭い避難所の中で動かずに寝ているだけが多い。

「皆さん、食事は自分で取りに来てください」と声を掛け、各自が受け取りに来るカ

フェテリア方式に変えた。すると高齢者も歩き出す。食事を手渡しする時に少しだけでも話ができるので、交流するきっかけがつかめた。

小学校の授業が始まることになり、別の避難所に 200 人で移動した。移動した場所は体育館で、釜と流ししか設置されてなかった。私は教育委員会に出向き「教育も大事だが、命を守るには食事が大切です。それなのに配膳場所もない調理設備では 200 人の炊き出しはできません」と訴えて、至急に設備を作ってもらった。

### 声を掛け合いながら逃げる

姑や古老から昔の津波のことはよく聞いていた。海の仕事をしているので「地震が来たらすぐに高台に逃げろ」という教えは、身体の奥深くに沁み込んでいる。協力隊では避難訓練や災害時の対応について研修も実践も重ねてきた。活動は「自分の命あつてのもの」と思っている。役目であっても自分の命を守れずには人の命を守れない。声を掛け合いながら逃げるのが本当に大事。今回は地震の後、直ぐに津波が来た。その間の時間が短かったように思う。

人々の意識に「地震が来たらすぐに逃げる」ということが、身に付いていなかった。「ここまで津波は来ない」と、ほとんどの人が理由もなく思い込んでいる。先人の知恵は伝えられてきたが、昭和 8 年の津波を経験している高齢者の多くが「ここまでは来ない」と思い込んでいる人が多く、避難の声掛けにスムーズに応じてくれなかった。聞いた話だが、年寄りと一緒に逃げた人はその時足元に水が来ているのを知りながら、年寄りにそのことは伝えず、とにかく一生懸命に共に逃げた。後で高齢者にその話をすると「知らなかった。分かっていたら足がすくんで逃げられなかった」と肝を冷やしたそうだ。

災害に関しての認識や理解は全体に足りない。私は後ろを振り向かなかつたので実際の津波を見ていないが、以前見たスマトラ地震津波の映像が、すぐに眼に浮かんだ。波が来ているのにただ見ているだけで逃げ遅れて命を失った人もいる。必死に逃げなければいけないのに、それが伝わっていなかったことがなんとも悔しい。防災警報がもっとじゃんじゃん伝えてくれればよかったのに・・・。

停電で非常電源に切り替わったが、車の中にいた人は警報が聴こえなかつたとのこと。正確な情報を早くきちんと流して欲しい。

### 被災体験を次世代に伝承

今回の避難所での支援活動は、婦人消防協力隊に加え地域の人たちや様々な団体が、とにかく出来ることはみんなで作るという、力を合わせての活動であった。協力隊員は、状況に対応した行動がとれるように日頃から訓練を積んでいる。地域の人たちも我々の活動をよく理解してくれている環境だったからこそ、そして地域全体の協力があつてこそその活動だつたと思つている。

今回の震災と支援活動体験は、自分にとって本当に勉強になった。前からそして現在も、孫たちには日常的に津波や地震のことを話している。学童期の子どもたちは、

学校で防災教育や避難訓練を受けている。被災体験と津波のことを次世代の人たちにきちんと伝えるのが、これからの私の仕事だと思っている。

## ●黒澤さんの場合（沿岸部・赤浜地区）

### 間一髪で帰宅

地震発生の時間帯は、小学生の孫2人を迎えに大槌小学校に来ていた。突然の地震で立ってられない。校門の塀にすがってこらえた。1年生の孫はちょうどランドセルを背負い、靴の履き替えも済ませたところだったので、即校庭に出てきた。その時、校庭に亀裂がサーッと走った。孫が地割れの溝に落ちないかとひやっとした。2年生以上の児童全員は、上履き靴のまま手ぶらで校舎から飛び出してきた。直ぐに校庭の亀裂を避けて整列。教師は、保護者を確認したうえで子どもを引き渡した。教室にランドセルを置いてきたことを孫が気にするので、教師に言ったら「このまま早く帰宅し避難してください！」と強く言われた。子どもたちは慌てず冷静に行動していた。日頃の避難訓練が行き届いていると思った。揺れは大きかったものの情報が全くなかったことと、孫を無事に迎えることができた安心感からか、私自身は大災害が始まるとの意識は薄かった。車での帰路は信号にまったくひっかからずに帰宅した。後で知ったがそれは停電のためであり、バスの後を走ったことも幸いした。私の車は通行止めになる前の最後の1台だった。

### 火災で避難所へ

津波襲来後、近所の19軒が火災に遭った。斜め前の家まで類焼したが、我が家は無事に残った。帰路と火事の2度の危機一髪から逃れることができた私たちは幸いだったと言えるが、火災に遭った近隣の方々は気の毒で、言葉もない。

孫たちが火事を怖がるので近くの避難所に行った。雪が降って寒かったが廊下で過ごした。夜中におにぎりが配られたが私たちの分はなかったので、その夜は何も食べなかった。2日目の夕方、ワゴン車で全員が別の避難所に移動した。道路が通行止めで戻れなかったが5日目に自分の地区に戻り、赤浜2丁目の支援活動担当を申し出た。福祉作業所に火事被災に遭った30人ほどが避難していた。

### 支援物資の配布役に

私は炊事が苦手なので、炊き出しは他の隊員に任せた。そして避難所への支援物資オーダーや在宅被災の家への物資の配布を担当した。当初は物資配布の流れに支障が多かった。避難所の避難人数と構成、地区内で在宅避難している家族内容などをつかんで必要な数量を発注するのだが、物流システムがうまく機能せず混乱。物資が足りない避難所がある一方、余っている避難所もあるなど物資配布の混乱が頻発した。

190名・47軒を担当したが、平等な配布は難しい。不足・不満を訴える人がいる一

方、在宅避難者は支援物資が提供されることを知らず、「申し訳ない。ありがたい」と遠慮し過ぎの人もいる。人の気持ちや置かれている状況を思いやることが必要だった。

### 被災者意識の違いが表面化

避難所に避難され人たちは、家を流された、火事に遭った、家族が行方不明等の理由で、「自分たちこそが被災者だ」と思い込んでいる人が多く、最初は不安や心配でメソメソしていたが、日が経つに従い、態度が横柄になってきた。在宅避難者や、親戚・知人の家に身を寄せている避難者（これも1ヶ月間までが限界なのだが・・・）も、被災という意味では全員が被災を受けている状況なのに・・・。

家は半壊状態で辛うじて残ったが、電気も水道もなく2階暮らしの人に対して、避難所にいる人は「おめえら、畳の上に寝ているんだろ・・・」みたいな開き直りが表面化してきた。避難所は温かく食材も豊富だったが、在宅避難の人は、実際に生活に支障をきたしている場合もあった。また居住地域によって微妙に生活意識が違うので、人間関係を円滑に進めることは難しい。

日がたつに連れて物資が豊かになり、オーダーが順当に通るようになった。在宅避難者から「隣家と違うものがきた」との不満も聴こえてきた。パンは余るほどに支給され、特に味のついた菓子パンが喜ばれた。同じものが続くと「もう飽きたがや・・・」など言われた。各家の嗜好を把握して物資のオーダーをする。避難所の炊き出し食材のオーダーも担当した。配布は8月10日まで続けた。大量調理になれている自衛隊の炊き出しは「美味しい」と好評だった。本当に感謝している。

### ボランティアの派遣を実施

時期を追うごとに避難所の避難人数が少なくなっていくのに反比例して、各種のボランティアの来訪が多くなってきた。せっかく来ていただいたのに参加者が少ない。在宅避難者に対応してもらえないかと交渉し了解を得てから、在宅避難者に参加を呼び掛けた。マッサージとか手芸、刺し子、足湯などのボランティアを在宅避難者の家に連れて行ったり、在宅避難者同士を数人集めてサービスを受けてもらった。私はお世話役として足湯のお湯を運んだり、楽しんでもらえるようにした。在宅避難者は基本的に遠慮深い人が多いが「また来て欲しい」といった要望も出されるようになり、少しだが癒しを提供できたかなと思っている。

### 避難所の自主運営

避難所のトイレ掃除は、「被災者が自主的にやってください」とお願いした。避難所の待遇やその他の情報はすぐに地域に行渡る。「トイレ掃除までさせるんだって・・・」とのうわさはすぐに広まる。細かい事を気にしていたら何もできない。私は元来快活な気性なので世話役は以前から苦にならない。「声掛け・呼び掛け」は、助け合いながら生きていくのに大事な事だと思っているから。

## 被災事情は微妙な話題

私の一家に対し「おめえの家は残ったんだよな・・・」といった暗黙の視線を感じないわけではない。しかし私の実家の集落は全部流された。兄弟は未だに行方不明であり、他の親類・縁者家族も被災して避難所生活だ。身内の被災のことは微妙な問題だ。6ヶ月経ったが、それぞれの被災事情を聞くことはしない。できないのが、なんとなく共通の礼儀になっている。

大震災から以後、人と人の会話で触れてはいけないことが生まれてしまった。私は言葉とか態度に身内の被災に関する感情は出したくない。精一杯元気なフリをして、避難所や在宅避難の人たちのお世話をした。

## ●兼澤さんの場合（内陸部・金澤地区）

### 即、炊き出しの準備

地震発生時、私は家族とハウス内で椎茸栽培の作業をしていた。1m長の椎茸原木がゴロゴロと転がり出した。ハウスの前の池の水が大きく津波のように立ち上がり色が濁ってきたので、「津波が起きた」と思った。親戚や家族のことが心配だった。夫は消防団員なのですぐに「浜に行く」と言い残し出て行った。

沿岸部から内陸部の金澤の避難所に被災者がやってくるのは明らかなので「炊き出し」の準備をする。この地区にある4カ所の避難所に続々と避難者がやってきた。

我が家は年間の自家消費分の米をモミの状態でもみの状態で保存し、その都度電気精米機で精米して使っている。停電なので納屋から昔のディーゼル精米機を持ち出し、精米作業から支援活動が始まった。近くの避難所には4升釜があり自宅にも大きな釜がある。ガソリン・軽油など油類の調達も必要だった。

消防団はその晩から出動した。避難所被災者の分と消防団への炊き出しをする。水は湧き水、幸いプロパンは使えるので米を炊く。自家製の梅干1斗5升も結局全部供出した。昨秋は松茸が大豊作でたくさんキノコ類やうなぎなどが自宅のストッカーに保存してあったが、停電なのでこれらの保存食材や野菜などをすべて出した。もちろん我が家だけのことではなく地域住民すべてが、快く供出した。

食材は豊富だったので炊き出しは好評だった。のりを巻いたおにぎりでは飽きるかと、梅漬けのしその葉巻きのおにぎりも出したが「しょっぱ辛くて旨い」と喜ばれた。被災5日目から支援物資が届くようになった。私は薄情かとも思ったけれど、避難所被災者の自主性が必要と思い「自分たちでやってほしい」と伝えた。そして米の炊き出しのみ、その後1ヵ月間支援を続けた。

### ホンネは働いている人に温かいものを食べさせたい

避難所に避難されている人は数日も経つと「油（ガソリン・軽油など）が欲しい」等々、さまざまな要求が多くなってきた。「私の夫や息子は今も消防団に出て働いてい

る。油が不足しているので節約しながらやってるんだぞ」と、つい応じてしまった。

消防団への炊き出しは自宅でおにぎりを作る。ガレキが燃えて山火事に進展した。消防団に炊き出しを届けたいと持参したら、通行止めにひっかかり「死にたかったらどうぞ行ってください」と言われた。みんな気が立っている時だから仕方ない。そのまま帰宅した。

正直「一番働いている消防団の人たちに温かいものを食べさせたい」という気持ちがある。1週間も温かいものは食べず、消防車内で仮眠して働いている人たちに炊き出しを届けることができなかった。

山火事の際は消防団が出動する。消防団員は必ずおにぎりを持参するのが習慣だ。山間部の人たちは山火事の怖さを熟知している。消防活動はこの地域に暮らす者にとって生命線を守ることなのだ。以前のことだが山火事が起きた時、真夜中だったが私ひとりで味噌汁とおにぎりの炊き出しを持ち、無線で連絡しあった待ち合わせ場所の墓場で、消防団に手渡したこともある。また無線連絡が取れないが、川を挟んで遠くまで見通しが利く日には、両手でおにぎりを握る動作をして炊き出しを伝えることもする。消防団員の妻は、みんなそんな気持ち。それは私の地域全部の家に代々続いていることだ。

### トイレが足りない

避難所避難人数に比較してトイレの絶対数が足りなかった。我が家の裏の杉山に入り込んで用を足す人が続出。杉山をトイレにしないよう視界を遮る枝をはらった。水洗に慣れている人には不自由だったと思う。手を洗うのには沢の水を使ってもらった。トイレの不便と同様に、避難所で女性は着替えの場所がなくて困っていた。

### 炊き出しに管理規則？

他の避難所におにぎりを差し入れした時に、「アルコール消毒した容器におにぎりを入れてきたか」と避難所を管理する人に聞かれ、食品管理上の事なのだと理解したが、一瞬唾然とした。聞いた話だが、「おにぎりの梅干は市販品を使ったか」と聞かれた人もあったそうだ。

### 立場の違いが意識の違い

私の妹2人は未だに行方不明だ。何も言えない気持ち。避難所にいる人は、最初の頃は感謝してくれたが、日が経つにつれ、「おめえたちには家がある。俺たちは家を流された。家族も行方不明だ」と開き直り、態度が大きくなっていく。私たちも同じように家族・親戚の安否も分からない中、精一杯の支援をしているのに、彼らとどのように付き合っていくか考えた。それで協力隊としては1週間で一応の炊き出しは止め、避難所被災者たちが自主的に炊き出しをやってくれと突き放した。今はそれでよかったと思っているが、避難所被災者との間に生じた意識の違いを乗り越えるには、どうしたらよいのか悩み続けた。米の炊き出しだけは1ヶ月続けたのだが、他

地域では避難所が閉所になるまで炊き出しを続けたところもある。その場所・地域によって対応はさまざまだった。

今回の事では個々人の資質が見えたように感じる。当初は安否情報が飛び交い、会話も進んだが、日にちが経つごとに人々の安否に関しては、みんな口が重くなっていく。同居家族の中で亡くなった人がいると聞くと、もうそこで息を吞んでしまう。避難してきた人との会話がぎくしゃくし空気が変わっていった。今も小さな子どもたちはトラウマがあるので地震があると怖がる状況だ。

## ●コメント

震災発生時の行動はそれぞれの環境や状況によって違うが、どなたにも緊急時のドラマがある。自身も被災しながら協力隊のリーダーとして、発生直後に活動を開始する。まず自分と家族を助け、そして「炊き出し」などの避難所支援に携わってきた。臨機応変その場その場での機敏な対処を可能にしたのは、地域の中での「協力隊の結束」と「地域の理解」があり、また各々が防災研修や訓練を怠らなかった結果といえよう。協力隊だけでなく地域全員の協力の上に実現した活動だ。地域コミュニティが災害救済活動のベースとなっていた。

大槌町は、昭和 52 年 1 月に振興山村、辺地、過疎地域の指定を受けている。故なる地域特性の中で、地域共同体の絆があり、昔からの地元に根付く自助・共助の精神が発揮された。

「津波が来たらまず逃げろ」の昔からの教訓があるにも関わらず、過去に大きな津波を体験している高齢者の避難誘導の難しさがある。災害弱者への支援方法と、防災意識の強化が望まれている。

支援活動は避難所の主に炊き出し支援が中心であった。自衛隊などの公助が入らない初期段階では、地域住民による食材の持込みがなければ成立しない。炊き出しを円滑に進めるためのさまざまな配慮が不可欠だ。協力隊員は、得意分野を自主的に受け持って適材適所の行動をした。避難所被災者との対応への工夫も、ベテラン主婦ならではの、きめ細かさが発揮された。全戸加入が原則の地域で協力隊は地域交流のひとつの要であり、地域を自分たちで守っていく強い信念（困っている人がいたら助けたいという使命感）があった。

現在、大槌町中心部のガレキは片付けられたが、コンクリートの建造物は無惨な躯体を残している。市街地火災で約 400 戸が焼失、焼け爛れた建築物も多数ある。町のメインストリートに面した大槌消防署は、10.25m の津波高に襲われた。容赦ない津波の力で捻じ曲げられた痛々しい姿だ。

たくさんの墓石が倒れている墓場には、お彼岸に供えた花が風にそよいでいた。大槌小学校校庭に設置されたプレハブ棟仮庁舎内の大槌消防署でインタビューを行った。被災から 6 ヶ月が経過し、町のインフラ回復は進行中だ。しかし人々の心に大きな傷跡を残した事実は消すことはできない。「家族や親戚縁者の死、家屋そして大切な港の



流失という悲嘆と苦悩を子孫に2度と味あわせたくない。だからこの体験を伝えたい」  
との皆さんの強い思いを感じた。貴重なお話ありがとうございました。

(インタビュー及び報告書作成：宮川智子)